Persuasion における‘moderation’について

——Jane Austen の思想傾向の一側面——

久　米　　清

Walter Jackson Bate は *From Classic to Romantic, Premises of Taste in Eighteenth-Century England*[1] の結論のあたりで18世紀後半の変動期の英国思想の特徴を次のような言葉に要約しております。即ち‘traditional moderation, eclecticism, and repetitive self-scrutiny’[2] あるいは，‘empirical but compromising good-sense’[3] という言葉を使つております。また‘moderation’を‘an enviable capacity to reconcile apparently inconsistent elements’[4] と説明しております。そしてこのような思想は単にこの時代のみならず，すべての時代に通じる英国思想の特性であるともいつていますが，それはさておき，18世紀の英国思想について，もう二，三他の批評家の言及を拾つてみますと，例えば *Eighteenth-Century English Literature*[5] において Roger P. McCutcheon は‘originality よりも conformity’[6] といつていますし，Arthur O. Lovejoy は *The Greet Chain of Being, A Study of the History of an Idea*[7] で‘relative and practical understanding’[8] という Locke の言葉を引用して，結局‘intellectual modesty’[9] という言葉で時代特性を現わします。以上引用した言葉はそれぞれの批評家により，それぞれ異つた文脈の下に使用されており，全く同一の意味内容を持つているということはもちろんいえませんが，これらの言葉を貫ぬく一つの糸の存在は否定しえないと思います。それを‘経験主義’，‘現実主義’，‘折衷主義’あるいは，‘適度’，‘中庸’，‘常識’，‘謙虚’等々のいずれで呼んでもかまいませんが，こゝでは便宜上それらを‘moderation’という言葉で代表させたいと思います。

さてこれから本論に入るわけですが，その前に一つ云つておかなければならないことは，このレポートは，18世紀の英国思想の特徴が‘moderation’である，といおうとするものでも，また，そのような‘moderation’が Jane Austen の作品の中に現われていると断言するものでもありません。つまりそのような時代の思想との関連をあとづけようとするものでもありません。それには広範囲の資料と多角的な考察が必要であります。このレポートでは，Jane Austen の完成された最後の小説である *Persuasion* にうかがわれる彼女の思想あるいは物の見方の特徴について考えてみました。そしてそれを‘moderation’という言葉でまとめてみました。しかしその Austen の‘moderation’と先に述べた18世紀思想の特徴の一つと考えられる‘moderation’と一直線に結びつけようとするものではありません。もちろん Austen も同時代あるいはそれ以前の時代の climate と無関係である筈はありませんから，Austen の‘moderation’について考えることが，その時代の‘moderation’の内容を深めることに役にたつであろうという程度の控え目な希望は持つてもいいのではないかと思います。しかしそれも希望にとどめ，その希

望は胸の奥にしまつて，とにかくAustenの*Persuasion*にのみ目をそそいで見ようと思います。

でいよいよ*Persuasion*における‘moderation’について述べるわけですが，この場合‘moderation’をいう言葉でどのようなことを意味しているかといいますと，おおよそのところは，先に18世紀の英国思想の特徴について述べたところのものを流用していいかと思います。中でもB ate の‘an enviable capacity to reconcile apparently inconsistent elements’という説明は大いに重宝したいと思います。ところで，この説明を見ますとすぐに頭に浮かぶのは‘irony’のことです。例えば，Andrew H. Wright の‘the juxtaposition, in fact, of two mutually incompatible views of life,’[10]とか Marvin Mudrick の‘neutral discoverer and explorer of incongruities’[11]という‘irony’の定義は上述の Bate の‘moderation’の説明と奇妙にもよく似ております。もちろんBateの‘reconcile’と，Wright の‘juxtaposition’あるいは Mudrick の‘neutral’との間には明白な差があります。たんなる‘並置’‘中立’と‘調和’してしまうこととの間には明らかな差異があります。しかしこのレポートではその差異に着目し，‘irony’に対立するものとして‘moderation’を持ち出してきたのではなく，むしろMudrickやWrightの‘irony’をも含みこんだものを仮りに‘moderation’と呼んでいるにすぎません。‘irony’という言葉の持つ批判的なニュアンスをきらつて‘moderation’という言葉を使いたいと思つているだけです。

以上前口上が長くなつてしまいましたが，要するに‘moderation’という言葉で意味したいものは，物の両面を見る態度といつていいかと思います。断定することを極力避け，弦を離れた矢のように，一つの方向にのみ飛んで行つてしまうことを恐れ，常に一部を保留し，カッコづきでしか肯定しない態度，均衡のとれた物の見方，簡単に善悪のレッテルをはらない態度，簡単にもう駄目だと絶望しない態度，逆に簡単に有頂天にならない態度などなどをひつくるめて‘moderation’一語に背負わせるのは相当の重荷かとは思いますけれども，適当な言葉が思いつかないまゝ，やむをえず‘moderation’に頑張つてしばらくその重荷を背負つてもらわねばなりません。そしてこれから具体的な例をいくつか述べてゆくことで，少しづつその重荷を軽く出来ればと思います。

例えば物の両面を見る態度，そしてそのことにより極端に思いつめない態度は次の場面に現われています。heroine, Anne が19才の時に恋愛し，結婚したいと考えたが，結局亡き母の親友 Russell 夫人に，職業の不安定さと，財産の乏しさという理由で結婚しない方がよいと説得させられて結婚を思いとどまつた当の Wentworth が8年後に Anne の前にまた現れます。そして今度は彼は身分的にも財産的にも申し分がない独身の男性として現われます。彼がまもなく来ると知らされて Anne の心に様々な感情が押しよせます。しかしその感情に溺れきり，押し流されてしまいはしません。じきにすんでしまう，と考えて慰めます。そして表面は何事もなく，礼儀正しく挨拶して別れます。そのあとの彼女の気持を現わすのに，‘nervous gratitude’[12]という句が使われていますが，この矛盾する二つの単語の組み合わせによつてAnne の複雑な気持が適確に描かれています。このような句は人間は nervous であれば nervous, gratitude であれば gratitude でしかないという単細胞的な存在だとは考え

ず，nervous な gratitude が存在すると考えうる作者の物の見方から創られるものです。

このすぐあとで Anne は妹の口から，Wentworth が‘あのひとは分らないほど変つてしまつた’[13]，と云つていたと聞かされて，一時は‘深い屈辱’(p. 61) を感じますが，次ぎに，‘それはどうやら自分の酔いを醒ましてくれたそうだつた。昂奮を鎮め，心を落着かせ，だから自分を幸福にしてくれるに違いない’，(p. 61) と考えます。この‘深い屈辱’から‘幸福’への見事な転換のなかに Austen の思想の性格がはつきりと示されています。

意味の相反する二語の連結の例をもう二，三あげますと，例えば Anne から Wentworth が Louisa に愛情を抱いているということを聞いた時の Russell 夫人の心が，‘angry pleasure,’ ‘pleased contempt’ (p. 125) という言葉で現わされています。自分の大事な Anne に，かつては心を寄せていた男が，他の女性に心を移したことへの‘憤り’，また Anne よりもはるかに見劣りする女性になびいたことへの‘軽蔑’，そしてかつて自分がその男と Anne との結びつきに不賛成を説なえたことの先見の明が立証された‘喜こび’等々のいりまじつた感情が窺えます。とくにその押えても押えきれぬ喜こびが中心になつていることが，‘pleasure’ ‘pleased’ とくりかえされているところに現われています。

次の例はやゝ形を変えていますが，本質は変つていません。Wentworth が Louisa と手をきり自由になつたということを知つてから始めて Anne が彼と出会つた時の彼女の感情の動揺が‘It was agitation, pain, pleasure, a something between delight and misery.’ (p. 175) と説明されています。

また Lyme での事件をあとになつて回想しながら Anne は次のようにいいます。

> "but when pain is over, the remembrance of it often becomes a pleasure. One does not love a place the less for having suffered in it, unless it has been all seffering, nothing but suffering — which was by no means the case at Lyme." (p. 184)

このように回想において pain が pleasure となるというのはあまりにも常識的な言葉でしようが，こゝではそれにとどまらず，そのあとの文では unless という接続詞を用いて，suffering だけしか存在しない場合は別であると断り，suffering だけ存在するということはありえないとは断言しないという用心深さを示すところに Austen の Atsten たるゆえんがあると考えられます。

その後 Anne が Bath 滞在中の Musgrove 家の人々を訪れるころがあります。Anne はまだ Wentworth の気持をはかりかねております。そしてそこで彼に会えるであろうと思つて出かけて行き，予想通りそこで彼に会います。彼女はたちまち心の動揺の中に投げこまれますが，その動揺は，‘the happiness of such misery, or the misery of such happiness’ (p. 229) という句で現わされています。

このように人間の二重性に着目する作者の傾向は以上のような連語に端的に現われていますが，次の二，三の例においてもそれは窺うことが出来ます。

例えば，Anne がみんなと散歩に行く場面です。Anne はかつての恋人 Wentworth が他の女性と楽しそうに歩いているあとから物思いに沈みながらついて行きます。

Her *pleasure* in the walk must arise from the exercise and the day, from the view of the last smiles of the year upon the tawny leaves and withered hedges, and from repeating to herself some few of the thousand poetical descriptions extant of autumn, that season of peculiar and inexhaustible influence on the mind of taste and tenderness, that season which has drawn from every poet, worthy of being read, some attempt at description, or some lines of feeling. (p. 84)

（自分がこの遠足で見出す歓びは，どこまでも肉体の運動や今日という一日，また赤茶けた木の葉としなびた生垣に今年の最後の微笑みが投げられる趣や，秋を歌つた現存の無数の詩句の中のいくつかを復誦することなどから，汲み出さなければいけない。秋といえば，雅致を解するやさしい心には，汲めども尽きぬ特別な影響を与える季節である。）

このように Anne は 'tawny leaves' や 'withered hedges' よりなる詩的な秋の雰囲気にひたろうとします。しかし作者はそのような雰囲気に一途にのめりこんでゆく Anne のみを描くことはしません。このすぐ後に次の様な描写が対照的になされております。

…after another half mile of gradual ascent through large enclosures, where the ploughs at work, and the fresh-made path spoke the farmer, counteracting the sweets of poetical despondence, and meaning to have spring again… (p. 85)

（…彼等は，農夫が季節の詩的憂鬱を甘美な歌に読む詩人に逆つて，早くも春をとり戻そうとしていることを示す耕作中の畑があつたり出来たての道があつたりする大きな私有地を通つて，爪先き上りに半哩登つて…）

'counteracting' という言葉を使つてはつきりとその先に描かれてあつた 'sweets of poetical despondence' との対照を目論んでいることを示しています。'tawny leaves', 'withered hedges' と 'ploughs at work', 'fresh-made path', また 'autumn' と 'spring', そしてそれは結局，'poet' と 'farmer' の対照であります。heroine が詩的雰囲気にひたりたがつているところへ，このような 'farmer' を持ち出さずにはおれないところに Austen の人生観の傾向を見るわけです。Wordsworth の *The Solitary Reaper* における彼女——彼女とても farmer でしよう——の描き方と比べてみればそのことは一目瞭然です。Wordsworth の solitary reaper は詩と対立するものではなく，詩の効果を高めるもの，いや詩そのものでしよう。

さて Austen のこのような 'farmer' と 'poet' との対照のさせかたは，別の箇所では 'prose' と 'poetry' の対照として現れます。Wentworth の友，Benwick は婚約者をなくして悲しみに沈んでおり，自分の気持を理解してもらえそうな Anne に詩について話します。

For, though shy, he did not seem reserved; it had rather the appea-

rance of feelings glad to burst their usual restraints; and having talked of poetry, the richness of the present age, and… he showed himself so intimately acquainted with all the tenderest songs of the one poet, and all the impassioned descriptions of hopeless agony of the other; he repeated, with such tremulous feelings, the various lines which imaged a broken heart, or a mind destroyed by wretchedness, and looked so entirely as if he meant to be understood, that she ventured to hope he did not always read only poetry; and to say, that she throught it was the misfortune of poetry, to be seldom safely enjoyed by those who enjoyed it completely; and that the strong feelings which alone could estimate it truly, were the very feelings which ought to taste it but sparingly … she ventured to recommend a larger allowance of prose in his daily study… (pp. 100～101)

（何故なら，内気とは云え彼は決して打ち解けぬ人ではなさそうだつた。寧ろ普段抑へつけられている感情が，堰を切つて流れ出ると云つた風があつた。彼は詩のことを話して，今は詩の隆盛な時代だと言い…スコットのあらゆる心やさしい歌とバイロンの絶望の苦しみを描いた情熱的な叙述には大へん明るいことを示した。彼は悲嘆にくれる心情や不幸に打ちひしがれた心などを描いた様々の詩句を，わくわくする思いで幾度も口ずさび，何かとても分つてもらいたそうだつたので，彼女は，そういつも詩ばかり読まない方がいゝ，あまり詩を楽しみ過ぎると却つて害を受けるというところに詩の不幸があり，本当に詩を評価できるのはたゞ強い感情だけなのであるが，強い感情というものは，ほんの控え目にしか詩を味わゝぬ筈のものであると思うと，思い切つて言つた…。毎日の読み物としてもつと散文の量を多くする方がいゝと勧め…）

このように詩に溺れ込む Benwick に対し Anne は散文の重要性を強調します。しかしそれはあくまでも‘poetry’に‘prose’を対置するのみで，‘poetry’の役割を完全に否定するものではありません。‘always’を‘not’で，‘completely’を‘seldom’で打消ているところにそれは鮮やかに現われています。

次の例もほぼ同様です。Anne が看護婦さんたちの目から見られた病人について語ります。

"…What instances must pass before them of ardent, disinterested, self-denying attachment, of heroism, fortitude, patience, resignation—of all the conflicts and all the sacrifices that ennoble us most. A sick chamber may often furnish the worth of volumes." (p. 156)

（熱烈で私心のない自己犠牲的な愛情や，義侠勇気忍耐諦め，またわたし達の魂を昂揚するあらゆる争闘犠牲などの実例を，いやというほど見るでしよう。病室は時に数冊の本に匹敵する教訓を与えますわ。）

それに対し Anne の友達の Smith 夫人が答えます。

…"sometimes it may, though I fear its lessons are not often in the elevated style you describe. Here and there, human nature may be great in times of trial, but generally speaking it is its weakness and not its strength that appears in a sick chamber; it is selfishness and impatience rather than generosity and fortitude, that one hears of…" (p. 156)

（そんなこともあるでしようけど，でもその教訓が果してあなたが仰しやるように立派な形で示されますかどうか。試練に遭つて人間性の立派な面が現れる例も，ちよいちよいありますけど，でも大体から言つて，病室では長所よりも弱点が現れるんじやないでしようか。寛大さや勇気よりも，利己心や短気の方が現れるつて言うじやありませんの。）

このように Anne が人間の 'heroism' について滔々と弁じると，Smith 夫人は人間の 'weakness' について論ずるというわけです。しかしその Smith 夫人でさえも Anne の立場と真向から対立するわけではなく，'sometimes it may' と一応相手の立場を認めた上での反論であるところに Austen の面目があります。

同じ Smith 夫人が新たに Anne 一家に近づいてきた Elliot の '本当の性質' について語るところがあります。

"…Mr. Elliot is a man without heart or conscience; a designing, wary, cold-blooded being, who thinks only of himself; who, for his own interest or ease, would be guilty of any cruelty, or any treachery, that could be perpetrated without risk of his general character. He has no feeling for others. Those whom he has been the chief cause of leading into ruin, he can neglect and desert without the smallest compunction. He is totally beyond the reach of any sentiment of justice or compassion. Oh! he is black at heart, hollow and black!" (p.199)

（エリオットさんは，情も良心もない人です。陰謀家で用心家で冷血漢で，自分のことしか考えない人です。自分の利益や安楽のためなら，自分の評判に傷のつかない限り，どんな残酷なことでも，どんな恩知らずなことでも，平気でやる人です。人の身になつてみる気なんか，これつぽちもありません。自分が先に立つて破滅に導いた人達を，平気で無視し振り捨てられる人ですわ。正義とか同情なんてものは，てんであの人の側へは寄りつけないんですわ。あゝ，あの人は腹の黒い人です。実意のない腹黒です。）

このように Smith 夫人は，'without', 'only', 'any', 'no', 'the smallest', 'totally' といつた強調的な単語を使つて，冷酷な Elliot 像をうつたえます。しかしその語気に驚く Anne を見て，次のように反省します。

"My expressions startle you. You must allow for an injured, angry woman. But I will try to command myself. I will not abuse him. I will only tell you what I have found him.

Facts shall speak…" (p. 199)

（わたしの言い方に，びつくりなさるでしようけど，ひどい目にあつて怒つてる女の言葉だと思つて，大目に見ていただきたいんです。でも，なるべく昂奮しないようにいたしますわ。非難はやめにして，感じた通りのことだけ申しましようね。事実に証明させることにしますわ。）

Smith 夫人は Elliot の冷酷さに最上級の批難をあびせかけますが，そのような批難をあびせかける自分が 'injured, angry woman' であることをはつきりと自覚しております。ある発言なり，意見なりを正確にとらえようとする場合，それらの主体がどのような情況の下にあるのかを考慮にいれる必要があります。ある人生観なり，思想といつたものでさえも，永遠不変のものではなく，ある情況の下に生じたものであることを心得ておかなければなりません。だからといつて人間が真空の中に存在しえない以上，何らかの情況につねにとらわれざるをえません。だから肝要なことは，常に，情況に応じて，自他ともにふりかえつて，プラス・マイナス誤差いくついくつが存在するのだということを知つておくことであります。Smith 夫人の 'injured, angry woman' という反省はそのような誤差の確認であります。Smith 夫人はこのように誤差を確認した上で出来るだけ事実をして語らしめようとします。

そのあとで Smith 夫人は Anne に Elliot が自分の夫にあてた手紙を見せ，Elliot の非道さを裏付けようとします。その手紙に対する Anne の反応は次のようです。

Anne could not immediately get over the shock and mortification of finding such words applied to her father. She was obliged to recollect that her seeing the letter was a violation of the laws of honour, that no one ought to be judged or to be known by such testimonies, that no private correspondence could bear the eye of others, before she could recover calmness enough to return the letter which she had been meditating over… (p. 204)

（アンは，父に対してこんな言葉が使われているのを発見した驚愕と屈辱に，直ぐには打ち勝つことができなかつた。けれども，人の手紙を読んだりして，これは信書の秘密の法律を破ることだ，こういう証拠で人を判断したり知つたりするのはよくない，どんな私信でも他人に見られてはやり切れないにきまつている。そんな考えが頭に浮ぶと，彼女はやつと落着きをとり戻し，今まで思案していたその手紙をスミスさんに返し…）

Anne は打ち勝ちがたいほどの驚愕と屈辱をその手紙から受けながら，その手紙が誰から誰にあてられたかという情況を考慮にいれます。このように自から驚愕と屈辱の中にありながら，このような check をしうるというのは一体どのような能力によるものでしようか。しかしこのような能力こそ reality にせまりうるものではないでしようか。

Anne は Smith 夫人の話を聞き終つたあとで，次のように考えます。

…she listened to a recital which, if it did not perfectly justify the unqualified bitterness of Mrs. Smith,

proved him to have been very unfeeling in his conduct towards her, very deficient both in justice and compassion. (p. 208)

(…話に耳を傾けた。その烈しい憎悪を含んだ話を聞いていると，必ずしもスミスさんにばかり歩があるとも思えなかつたけれど，彼の仕打ちが，冷酷で道義に悖り人情を欠いていたことは間違いないと思えた。)

Anne は Elliot の冷酷さははつきりと理解しますが，一方 Smith 夫人の 'unqualified' な激しい批難に対しては 'perfectly' には承認しません。そしてこのあとに Smith 夫妻について批判します。——同情をこめてではありますが。

このように物事を批判的に，客観的に見ようとする態度は，無制限なもの，最上級のものに疑問を持ち，中庸を，適度を尊ぶ態度と連がつています。'perfectly' 'completety' は 'not' で打消さざるをえない態度です。

もう一つ二つ例をあげてみましよう。Anne が Wentworth が通りを歩いているのを見て，戸口の方に行こうか行くまいかと迷う場面です。

…She left her seat, she would go, one half of her should not be always so much wiser than the other half, or always suspecting the other of being worse than it was. (p. 175)

(彼女は席を立つた。わたしは行くんだわ，何も自分の中の半分が，必ずしも他の半分よりも賢いとは限らないし，他の半分の方が悪いときめてかゝる必要はない。)

こゝでも 'always' は 'not' で打消されており，自己の判断についての非常に流動的な態度を現わしています。Croft 提督の，"One man's ways may be as good as another's…" という言葉も上に述べた文句と非常に似ております。このような言葉は一見したところ，どこまでも判断を保留して，無原則的になつていき，行動しないためのいいわけになるような気がしますが，そうでないことは，Croft 提督のこの文句の続きを見てみればはつきりします。提督は続けます。"…but we all like our own best. And so you must judge for yourself…" (p. 127) このような積極的な，自己の判断を重んじる考えを，一見それと反対のような言葉のあとに続けるところに注目しないわけにはいけません。もちろん，"One man's ways may be as good as another's…" という言葉は一種のエチケット的な言葉で，こゝに力点を置きすぎることは間違いでしようが，たとえエチケットにしろこのような言葉をはかせるところに注意する必要はあります。Anne の例でも，彼女はそのような自己分裂的，自己諂晦的な台詞を云いながら，それを自分を行動させるバネとして使つているところに同様に注目する必要があるといえます。

以上相当こまごまとした例もなるべく丹念にとりあげてみましたが，このような発想の傾方がこの作品のテーマに現われていなければなんにもなりません。この作品のテーマは題名通り，結婚において '説得' は是か非かということであります。この '説得' の内容は，経済的身分的考慮を重視するようにということであり，それよりも自己の愛情を何よりも信ずかどうかということであります。そのどちらに作者は軍配をあげているかといいますと，一応愛情の重要性を説いてはいますが，結局のところは，A. H. Wright の見事

な分析のごとく，どちらでもなく，Wright の言葉を使えば‘irony’であり，Dorothy Van Ghent によれば‘reconciliation’[14]であり，このレポートでは‘moderation’と呼ぶ態度であります。拆衷，中庸，適度，釣合を重んずる態度です。

それは例えば次の場面に現われています。Louisa が防波堤の高い所から低い所へ，Wentworth の反対を押し切つて跳び，そこに倒れ，人事不省に陥ります。その時のAnne の感慨です。

Anne wondered whether it ever occurred to him now, to question the justness of his own previous opinion as to the universal felicity and advantage of firmness of character; and whether it might not strike him, that, like all other qualities of the mind, it should have its proportions and limits. She thought it could scarcely escape him to feel, that a persuadable temper might sometimes be as much in favour of happiness, as a very resolute character. (p. 116)

（この人は，誰でも性格の強い人は仕合せで得だと前に言つたことがあるけれど，それを今疑つてみる気はないのかしら，とアンは思つた。他のいろいろの性質と同じように，それにはそれで，やつぱり釣合と限度とがあるということに，この人は思い当らないのであろうか，とも思つた。人の言うことを聴き入れる性質でも，場合に依ては非常に果断な性格と同じように，仕合せに恵まれることもあるものだということに，この人が気附かぬ筈はない，とも思つた。）

この Anne の感慨は結局，彼女が説得されたことが一概にマイナスであつたとのみは云えないということを云おうとしているものであります。‘persuadable temper’と‘resolute character’とを併置させ，その間に‘alway’や‘completely’でなく‘sometimes’を置いているのも，すでに何度も述べたように，作者の用心深さであります。そしてそれは，この箇所で使われている，‘proportions and limits’という言葉に窺われる思想でもあります。

このように‘中庸’，‘適度’を重んずる態度は，紆余曲折を経て，Wentworth と Anne とがもう一度おたがいの心を確かめあい，一層しつかりと結びついた後で，彼が彼女の性格を讃美する言葉にも当然現われます。

…Her character was now fixed on his mind as perfection itself, maintaining the loveliest medium of fortitude and gentleness… (p, 241)

（ところが今は彼女の性格はみごと堅忍と柔和の中庸を得た完全そのものの如く，彼の心に焼きつけられたのである。）

こゝで‘fortitude’と‘gentleness’が共存しているのはいつもの通りですが，ついにこゝでは，‘perfection’という作者によつて否定され続けてきた言葉が，heroine の性格を讃美するために持ち出されてきます。しかしそれは作者の思想が突然変異を起したわけでないことは，‘perfection’の内容が‘the loveliest medium…’であることによつて明らかであります。というより，ついに‘medium’が‘perfection’になつたといつてもいいでしよう。‘中庸’が‘完全’になつたのです。Anne がいかに‘中庸’を重

視しているかがわかります。

さて，‘説得’が是とも非ともされていないことがはつきり言及されている箇所は，ほとんど最後に近いあたりの Anne の言葉です。

“…for myself, I certainly never should, in any circumstance of tolerable similarity, give such advice. But I mean, that I was right in submitting to her…” (p. 246)

（尤もわたしだつたら，そう云つた場合，けつして忠告などはいたしませんわ。それは兎も角，わたしの申したいのは，わたしがあの方に従つたことは正しかつたということなんです。）

Anne はこのように，忠告に従がつたことは正しいが，忠告はしない，というわけのわからないことをいうのです。正しければ何故自分もしないのでしようか。もちろん自分と他人と違うということはあるでしようが，結局，Anne は，自分の愛情を大事にし，自分の意志を貫くことが正しいと信じたいのですが，しかし完全にそちら側にのめりこめないところに Anne の，そして作者の悲劇と身上があるのです。

さてこの作品の最後の章は次のような言葉で始められています。

Who can be in doubt of what followed? When any two young people take it into their heads to marry, they are pretty sure by perseverance to carry their point, be they ever so poor, or ever so imprudent, or ever so little likely to be necessary to each othre's ultimate comfort. This may be bad morality to conclude with, but I believe it to be truth… (p. 248)

（その後どうなつたかは，誰も疑う者はなかろう。若い男女が一旦夫婦になろうと思いついたが最後，たとえ二人はどんなにお金がなかろうが，思慮分別を欠いていようが，またお互にどうしてもこの人でなければ自分の最後の慰藉にはならないというわけではなくとも，大抵は根気よく初志を貫徹するものである。これは話を結ぶための教訓としては感心出来ないかもしれないけれど，でも私はこれが本当だと信ずる。）

このように，結論を述べる場合にも，これは‘bad morality’であるかもしれないが，しかし，‘truth’だと信ずる，と云わずにおれないところに，いささか歯痒く感じられるかもしれませんが Austen の Austen たるゆえんがあるのではないでしようか。

以上くどすぎるくらいくどく述べてきたのは，このような特長がたんに局部的なものではなく，広範囲にわたつて，多様な形で現われているということを納得していただきたかつたからにほかなりません。しかしこのような特長を‘moderation’という一言に背負わせることは，最初に述べたように，あまりにも荷が勝ちすぎているかもしれません。ただ，便宜上，この言葉を使つたにすぎませんから，その内容とする所を述べ終つた今，無罪——無罪かどうかは異議のあるところでしようが，——一応無罪放免ということにしたいと思います。他に何か適当な言葉がありましたら，おきかせ願いたいと思います。それとも，上述したものは，二つあるいは三つの特長が混在していて，もつと整理しなければ，

一言で現わすことは本来無理な注文であるというお叱りを受けるかもしれませんが。

ところで，Wayne C. Booth が *The Rhetoric of Fiction* の中の様々な realism の定義を並べているところでその一つとして，"objective," "detached," "dispassionate," "ironic," "neutral," "impartial," "impersonal" で作者はあらねばならないといい，その場合，読者に要求される態度は，"oversimplified blacks and whites" に基づくvisionを拒絶して，'the ambiguities of life' を受けいれることだといつています。[15] Booth はこのような態度の代表として Henry James をあげて，彼の小説観として述べていますが，[16] このような realism の態度は結局このレポートで述べた Austen の態度と結びつくと考えることは我田引水でしようか。このレポートの冒頭において，Austen の物の見方，思想傾向を，物の両面を見ようとする態度，断定することを極力避け，常に一部を保留し，カッコ附きでしか肯定しない態度，均衡のとれた物の見方，簡単に善悪のレッテルを張らない態度，簡単にもう駄目だと絶望しない態度，逆にすぐに有頂天にならない態度，等々と要約し，それを 'moderation' と呼んだわけですが，結局このような態度は realism への first step と考えてはいけないでしようか。

註

(1) Harper & Brothers, New York, 1961.

(2) *Ibid.*, p. 192.

(3) *Ibid.*, p. 188.

(4) *Ibid.*, p. 190.

(5) The Home University Library of Modern Knowledge, Oxford University Press, Maruzen Company Limited

(6) *Ibid.*, p. 2.

(7) Harper & Brothers, New York, 1960.

(8), (9) *Ibid.*, p. 8.

(10) *Jane Austen's Novels, a Study in Structure*, by Andrew H. Wright, Chatto & Windus, London, 1954, p. 24.

(11) *Jane Austen, Irony as Defense and Discovery*, by Marvin Mudrick, Princeton, New Jersey, Princeton University Press, 1952, p. 3.

(12) *The Oxford illustrated Jane Austen, vol.* v, *Persuasion*, ed. by R. W. Chapman, p. 60.

(13) *Ibid.*, p. 60. (訳は富田彬氏のをお借りしました。)

(14) *The English Novel, form and function*, by Dorothy Van Ghent, Holt, Rinehart and Winston, New York, 1961, p. 103. (これは *Pride and Prejudice* について使われた言葉ですが。)

(15) *The Rhetoric of Fiction*, by Wayne C. Booth, The University of Chicago Press, 1961, p. 38.

(16) *Ibid.*, p. 49.